

教育課程編成委員会 第2回議事録

日時：2016年9月23日(筋) 19時～20時

場所：15 教室

出席者： 白井幸久氏 三沢幸史氏 望月太敦氏 小檜山修平氏
八尾 勝氏 上松 剛氏 倉持有希子氏
列席者： 加藤和貴氏 品川智則氏 林 恵子氏

I. 聖書日課 コヘレトの言葉4章9節 林 恵子氏
聖書およびその解説を朗読。

II. 議事

1. 開会の挨拶

八尾校長より、今回の委員会では前回8/23に委員の皆様からいただいたご意見をもとに各学科で話し合いを進めてほしい旨の説明があった。

2. 部会

部会に分かれ7時40分まで介護福祉科と作業療法学科それぞれで話し合いを行った。

3. 部会報告

(それぞれの部会の記録は別紙の通りである。より詳細が記録されている。)

●介護福祉科 倉持氏より下記の通り報告があった。

2つの課題がある。1つは「ボランティアをもっと前面に出してはどうか」、2つ目は「実習から卒業までの流れをマップにしてはどうか」。

前者については、ホームルームなど機会あるごとに学生達にはボランティアを勧めていて、実際、4月～9月にかけて学生の3分の2は何らかのボランティアに参加している現状がある。全くボランティアに関わっていない学生は10名程度である。実習前にボランティアを経験することは色々な意味で効果があると感じている。今後は、学生達が自主的ボランティアを行う方向に少しずつもっていきたい。2つ目については、今年度の学生状況と教員がどのように対応しているかを委員に報告した。

●作業療法学科 上松氏より下記の通り報告があった。

カリキュラムについては現在たたき台を作成中である。1年生の確認テストの結果、成績不振学生AチームとBチームを作り、教員が個別に対応した結果、3分の1の学生には効果があったが、

残り3分の2に対しては、今後も引き続き指導が必要である。具体的にはノートの取り方をチェックしながら関わっていききたい。「高度な福祉機器について学生時代から情報を伝えていく必要があるのではないか」という前回のご意見に対しては、義肢装具学の中や、HCR（国際福祉機器展）を通して紹介していく予定。その他の展覧会の情報も伝えていきたい。

「学生のモチベーションをあげる」に関しては、委員から、作業行動学を使って学生達同士で自分の一日の行動を振り返らせてはどうかという意見をいただいた。ぜひやってみたい。学生達に努力をして成し遂げるという経験を在学中にさせたいと思う。

「地域で役に立つOTを育てる」については、日頃から教員がその点を意識して学生達には伝えている。本日委員からいただいた意見を生かし、介護予防などの切り口からもOTの役立てる場面を学生達に伝えていきたい。

4. 校長より閉会の挨拶

本日の委員会をもって今年度の教育課程編成委員会は終了するが、来年度も引き続き委員をお願いしたい。正式な依頼状は年明けに郵送する予定である。また、後期の学事暦で主だった行事は別紙の通りであるが、ご出席いただける行事があったら事前に連絡をほしい。

委員の皆さまへの感謝を伝え閉会となった。

記録 林恵子

部会（介護福祉科）報告書

出席者：白井氏、望月氏、倉持学科長 列席者：品川氏

主な議題

介護福祉科ボランティアに関する報告

実施状況

今後の方向性について

学習マップに関する報告

前回指摘（実習Ⅱ終了から卒論発表までどのようにつながりがあるのか可視化できるとよい）に関する解答

介護福祉科ボランティアに関する報告（実施状況・今後の方向性について）

品川 別紙を使用し、実施状況と今後の方向性について説明する。（別紙「2016年度介護福祉科（1年生）ボランティア活動に関する報告（2016年4月～2016年9月末）」参照）

白井 これだけの内容を行っていけば、十分なのではないでしょうか。学生のさまざまな課題や能力が低下している中で、本来のボランティアとは違う、さんえんキャンプなどの取り組みや連携もとてもよいと思う。

倉持 さんえんキャンプでは学生はよい部分を体験して、帰ってきている。多様なところに行くことになってくる中で体験していくことができれば違ってくる。

望月 ボランティア活動の参加を一度もしていない学生はいますか？

品川 きちんと統計をとってわけではないのであくまでもざっくりとですが、43名中30名は何かしらのボランティア活動に参加していると思います

白井・望月 引き続き、ボランティア活動を通じた学生指導の取り組みを実施して行ってください。

学習マップに関する報告

前回指摘（実習Ⅱ終了から卒論発表までどのようにつながりがあるのか可視化できるとよい）に関する解答

倉持 前回ご指摘のあった実習Ⅱ終了後の学びのマップに関して、今後明確にしていきます。

現在2年生の一部が、発達障害、知的障害の疑いがある学生が実習で大きな課題にぶつかっています。

そのような学生には、最終的には自分のできないことをきちんと理解し、できることが何なのか自分で理解していくことをゴールとして現在指導しています。きちんと何ができないのかを自分で理解することを大切にしていきたいと考えています。実習先にも事前に状況を説明し、実習先の指導者にきちんと見てもらえるように調整をしています。また通常の評価表とは別に、見ていただきたい項目（基本的項目）を示し特別に指導評価をしてもらうようにしている。

特殊な課題をもつ学生が来ている中で、福祉をしたいという気持ちをどのように尊重していくか、また指導の一つとして障害卒の仕事も必要に応じて、本人または保護者に伝え、より良い選択ができる関わりをしていきたと思っています。今後の人生のことを考えるときちんとした道を示すことが必要ではないかと考えています。

白井 大学にも、手をかけなくてはならない学生が増えてきている。そのような学生には、デイサービスでまずはボランティアというかたちで実施していき、その中で一つ一つ仕事を覚えてもらうようにした。その結果、常勤として働くことができるようになったのだが、常勤となったとたん、いろいろ課題が出てしまい、辞めざる負えなくなってしまった。

望月 自分たちができることがどれだけできるか、自分のできないことを理解してもらおうという話もあったが、その人にあった、職場の様子や雰囲気によって向き不向きもある。自分にはどのような現場が向いているのか、自分の特徴とあった現場は何があるのかなどを見つけるうえで、ボランティア活動は、自分のあった就職先をみつけれられることにつなげられるのではないのでしょうか。

部会（作業療法学科）報告書

出席者 三沢幸史 小檜山修平 上松剛 加藤和貴

主な議題

前回の内容についてシェア

1年生、期末テスト進行中。2年生、カリキュラム変更は進行中。3年生、実習中。成績不良者のグループAチームの他に第二グループのBチームを作った。

勉強する技術を伝えるという意味でノートチェックなども取り入れる予定。

ロボットやICT技術を使った治療機器に対して、学生時代から興味を持つようにする。筋電義手などを既に紹介している。福祉機器展でも見学する予定。

地域で活躍できる教育。教員が地域に出ていく。下地作りまでで、現段階では進んでいない。

学生のモチベーションについては保留

質疑応答及びディスカッション

【質疑】

三沢：Aチームについて

上松：ノートや資料整理からやらねば

小檜山：勉強時間がゼロなどについて、人間作業モデルに質問票（）がある。学生の習慣化を促す一役になるのでは。

上松：面談などで一日のスケジュールなどを確認している。

小檜山：見える化することで、学生自身が気づける可能性もある。

三沢：学生同士で一日の生活について話し合ってみる。プレゼンなども良いのでは。それも作業行動学系の授業の一環としてとりいれてはどうでしょう。

上松：いいですね。やってみます。

加藤：以前やっていたことがあるが、年々ペースが遅れ現在は行っていない。

三沢：作業療法の評価にもつながるので一石二鳥では。

Aチーム、Bチームの習熟度に合わせてやってはどうか。

上松：習熟度の前に、現在勉強の仕方から伝え考えてもらうようにしている。そこからやらないといけないのかというレベルからやる必要がある。

三沢：自分の子供でも悩む時がある（笑。少し勉強して出来てるつもりになっているが、実際はやったことが残っていない。なかなか本当の勉強にはならない。知識を蓄えることにならない。簡単に分かったということになる。苦勞して勉強しない。そういう努力を積み重ねて初めて定着する。そういう経験がないと、臨床で困る。積み重ねてできるということがわかっていないと・・・若い職員も積み重ねを報告できず困る。レベルは低くても、努力して定着させる経験が少しでも出来ると良い。臨床でも必要

な力である。

小檜山: どういうところで勉強の喜びを感じるのか

上松: 出来るということに単純に喜びを感じるのでは。

小檜山: 行動してできる。繰り返しが一番ではないか。

上松: 授業の組み立て自体が、考えて次の授業で考えられるような二段階で考えている。

上松: 小さな目標を立て「ほめる」ことを増やそうかと思う。

小檜山: 自分は臨床に出てから楽しくなった。楽しいと思えると良い。

加藤: 入学時から作業療法関連の雑誌を読むと勉強が楽になることを伝えているが、実行できていないため、学習支援という講義の中で実際に図書室まで行き読んだ。その後発表もしたが実際に足を運べば良かった経験になった様子だった。

小檜山: 学生さんはなかなかその必要性が分からないのでは

上松: 最近、文献は雑誌などに載っているのしたことなど知らないの、学生はメリットが感じないのかもしれない。

三沢: 新人職員も必要な文献が見つけれられない。難しいですね。

三沢: 地域について。予防事業など。加齢とともに元々あった機能低下が露呈することも多い。そういう対象をこちらでも理解しきれていないところがあって。介護予防に行くと、ご本人たちは「自分はこういう生活をしてきている」という感じなので、ちょっと（病人や障害者とは）違う。そういう中に入っていくといけな。そういうモデルを少しずつ理解する必要があるかな。

上松: 今言っていたことが地域で活躍することにつながる。

三沢: 病気になって入院したら、もう一度情報を洗いなおしていく流れだが、予防の人は周りが亡くなったりして、今まで自分がやってきた活動が狭まってきているが、自分でも気づいていない。自分では病気とも思っていないが、だんだん生活が狭くなっていく。そこで作業療法士が関わる部分が出てくる。作業療法士の視点で「こうするとできますよ」「あ！そうか。ではやってみよう」よなる可能性も。

三沢: 墨田区の都リハの斉藤さんが訪問C型など積極的に行っている

上松: 福祉用具もHCRでみるというのものもあるが、他にも方法はありますか

三沢: 日本医療福祉展示協会（ホスペック）、ジャパンロボットウィークなどもある。介護のロボット技術など参考になる。アイスイッチも医療と関係ない業者が販売している。介護やリハで使う予定だったが、産業ロボットで使えないかという話になったり、いろいろ考えている。つまり、いろんな産業がやり取りする中で産まれるものがあるのでアンテナを張っておく必要がある。

以上